

カウツキーたちの再評価

— コラコフスキーの『マルクス主義のおもな流れ』に依拠して —

古 田 耕 作
 岐阜大学教養部ドイツ語研究室
 (1981年10月5日受理)

Vorbereitung für die Umwertung der Non-Bolschewistischen Sozialisten

— aufgrund der „Hauptströmungen des Marxismus“ von Kolakowski —

Kosaku FURUTA

スターリンは悪玉で、レーニンが善玉であるか。レーニンとスターリンとの関係は連続か断絶か。スターリン主義の形成に対して、レーニンの責任は、どのていどか。シロか、クロか、それとも灰色か。つまり「レーニンにおけるスターリン主義」という嫌疑にたいして、レーニンのアリバイは立証されるだろうか。この問題を調査するには、ものすごい長時間の重労働が必要であろう。

さいわいにして、この問題にたいして、ひとつの調査報告がある。(この問題だけを取りあつかっているのではないが)。コラコフスキー(コワコウスキ)の『マルクス主義の主要な諸潮流』である。^(註1)

コラコフスキーは1968の知識人、学生の「自由化要求」の運動に参加したため、ワルシャワ大学から追放され、モンリオール大学、カリフォルニア(パークレイ)大学で勤務したのち、1970年らいオックスフォード大学で「研究教授」(フェロー)の職にある。そして彼は「社会自衛委員会」(KOR)の、ただひとりの国外在住メンバーである。^(註2)この「委員会」が新聞『ロボトニク』(労働者)を発行して、自主労組「連帯」の結成に貢献した。^(註3)

結論を先にいえば、コラコフスキー(以後Kと略す)によると、レーニンはクロである。しかし、それを裏づけるデータを調査せねばならない。

Kによればレーニンを調べるためには、まずブレハーノフを調べねばならぬ。

ブレハーノフはロシアにおけるマルクス主義の父といわれる。彼はレーニンの世代にとって先生であった。彼はロシアにとって最高の権威であっただけでなく、西欧でも著名であった。彼は、彼が理解したかぎりでのマルクス主義の教条を、全面的にうけいれ、その普及に大きく貢献した。マルクス主義の「教科書」をかいたのは、世界中で彼が最初である(『マルクス主義の根本問題』1908)。

彼が「普及に貢献した」ことの反面として、彼のマルクス主義は、通俗化、カテキズム化の傾向におちいった。

彼にとってマルクス主義は、どんな問題にたいしても解答がだせる——（こまかい分析やデータ集めをやらなくとも）——百貨店のような、便利な完成品、またはそれに近いものであった。

第2インターの主流をなす西欧のマルクス主義者にとって、マルクス主義は「社会の発展にかんする理論」であって、かならずしも特定の認識論的、形而上学的立場に立つものではなかった。（カウツキーも、しだいにこの見解に同調した）。ところがプレハーノフの見解では、社会理論と哲学的部分とは、切りはなせない統一体である。「彼はたぶん、マルクス主義哲学を総称するのに、『弁証法的唯物論』という名称を使用した最初の男である」。^{註4} 弁証法的唯物論の原理と思考規則とを、歴史的社会的現象に「適用」したものが「史的唯物論」であり、両者は不可分な統一体である。したがって社会民主主義（当時）は、哲学的問題にかんして、無関心、中立的であることはできない。これをプレハーノフは強調する。この態度をレーニンが、そしてレーニンの後に、ソ連の国家イデオロギーが相続する。

プレハーノフが実質的にはソ連の国家イデオロギーの創始者でありながら、公的には、ソ連において「マルクス主義の古典」として認められないのはなぜか。それは彼がボルシェヴィーキの路線に反対したからである。この問題にかんして、Kの集めたデータを、いくつか拾いだしてみよう。

「社会主義社会への歴史的必然性」はマルクス主義の教条であり、これをプレハーノフも熱烈に信奉していた。しかしロシアにくらべて、資本主義が高度に発展していた西欧のマルクス主義者にとっても、「社会主義社会」の実現は、かなり遠い未来のことであった。資本主義（生産力）が、どのていど発展すれば、いまの生産関係が生産力の生長の邪魔物に転化し、「社会主義社会」への質的飛躍（革命）が可能になるのか、誰にも分らなかった。（ローザ・ルクセンブルクは、この「歴史的必然性」を「科学的」に証明しようとして、『資本蓄積論』という奇妙な理論を構築した）。とにかく、目的は、はるかな未来の「革命」であった。だが、この目的のための活動の内容は、実質的には、時と場所におうじて必要な「改良」——労働条件の改善要求、政治的権利の拡大要求等——であった。そして、看板としての「革命運動」と、実態としての「改良運動」との関係については、激しい論争がつづいていた。

このような動きの中で、プレハーノフも亡命先のスイスで、ロシアの「革命」のことを考えていた。後進国ロシア。政治的権力と宗教的（イデオロギー的）権力とを、あわせもつツァーリズム体制。農民が圧倒的な多数で、労働者はまだ少数である。ロシアにおいても資本主義は発展し、労働者の数も増大するであろう。だがそのためには時間が必要である。

究極の目標は「社会主義革命」であるが、当面の目標は、ツァーリズム体制を倒し、議会制民主制を実現する「ブルジョア民主主義革命」である。そのために「改良」的努力のつきかさねが不可欠である。

資本主義の発展が低く、制度としての、考え方としてのデモクラシーが貧困な国家、こういう国で、いっきょに「社会主義革命」をくわだてることは犯罪的である、と彼は力説する。『われわれの見解のちがひ』（1885）の中で彼はいう。とくべつの状況に乗じて、ひとにぎりの革命家集団が、クーデター的に国家権力を奪取する——こういうことが万一できたとしても、ロシア資本主義の未発展のゆえに、けっして社会主義体制は実現できないだろう。「このような革命の結末は、古代の中国の、またはベルシヤの帝国と似たりよったりの、政治的な奇形児の誕生、つまり、コミニズムの土台の上に、ツァーリズムの専制の二番せんじが

立つことになろう」。(註5) この予言は、いまの「現実の社会主義国家」にたいして、当たっていないだろうか。

同じく「歴史的必然性」という「教条」を信奉していても、客観的な「必然性」に力点を置くか、「革命のための努力」に力点を置くかによって、相反する立場が出てくる。ひとつは、第2インターの正統派の立場であり、プレハーノフもこれに近い。この立場は、「革命的」、「改良」的活動を軽視するわけではない。だが、こういう活動は、「社会的発展」の一契機でしかない。資本主義は、冷酷に、非情に、「客観的」に、「必然的」に、発展し、成熟し、爛熟し、行きづまるのである。この立場の対極をなしているのが、ボルシェヴィーキやジョルジュ・ソレルの立場である。(註6) この立場も「社会主義への必然性」を信奉しており、資本主義の発展を軽視するわけではないが、その関心の重点は、革命的勢力の活動、影響力の増大にある。

プレハーノフは、こういう立場から、後進国ロシアにおける「社会主義革命」に反対したのである。しかし、この基本的姿勢は、その後も変化しなかった。1917年2月、ツァール体制は倒れた。彼は3月にロシアへ帰った。彼は信じた。かつ望ましいと思った。こんご、かなり長い期間、憲法にもとづく議会制がつづくことを。したがって彼は「社会主義革命」をやろうとするボルシェヴィーキと戦った。だが10月革命はなしとげられた。これは彼には、ボルシェヴィーキの過失と思えた。せつかくの「ブルジョア民主主義革命」の諸成果が危うくなる、と彼は心配した。まもなく彼はフィンランドのサナトリウムで死んだ。10月革命は、グラムシのいうごとく、「『資本論』に反する革命」であった。

このように政治的見解では、彼は第2インターの主流に近かった。しかし哲学、世界観の問題となると、第2インターが、概して寛容であったのに反して、彼は硬直的であった。彼の「弁証法的唯物論」とは、エンゲルスの思想の一部分を、よく吟味しないで、不当に拡大解釈したものである。この通俗的な「マルクス主義哲学」は、後年、魔女狩り用の「踏み絵」ともなり、「イデオロギー神官たち」の、セレモニー用の「のり」としても役立った。

ところで、彼とボルシェヴィーキとの関係をいくらか眺めておく必要がある。

ロシア社会民主党は1903年、ブリュッセルとロンドンとで開催された党大会で、ボルシェヴィーキとメンシェヴィーキとに分裂した。Kによれば、メンシェヴィーキは、ドイツ、フランス、オーストリーの社会民主党のような「大衆政党」を指向していた。これに対して、ボルシェヴィーキは中央集権的な「職業革命家」の党（「前衛」党）であった。プレハーノフは、分裂のさいに、一時的にレーニンと同調していたが、まもなくメンシェヴィーキへ移行する。

彼のボルシェヴィーキ批判。ボルはウルトラ中央集権主義である。ボルはプロレタリア階級の支配ではなく、プロレタリア階級への独裁を求める。労働者階級は、それ自身では社会主義的意識を獲得できないというレーニンの主張は、マルクス主義にも、歴史的な経験にも反する。これは労働者階級への不信をあらわす。職業革命家とインテリだけにしか、政治的イニシヤティヴをみとめないことになる、等、等。

彼のボルシェヴィーキ反対は、年とともに強まる。いわく「ブランキー主義」、「主意主義」。ボルは革命が、社会的発展の自然的な諸法則にもとづいて起るものと考えず、ひとにぎりの

陰謀家たちの意志によって起る、とみなしている等、等。

しかも彼は、労働者階級の同盟軍として、資本家階級（の一部）を考え、レーニンは農民を考えていた。

こうして、彼は、公的には、ソ連のイデオロギーの古典とはみなされない。「しかし彼は、このイデオロギーの、もっとも重要な事実上の権威者のひとりでありつづけた。このイデオロギーこそ、党、国家、警察に支援されて、マルクス・レーニン主義の名称のもとに、しだいに、マルクス主義的思考を打ちこわすことに成功した」。(註7)

マルクス主義とレーニン主義はどういう関係なのか。

レーニンに反対するマルクス主義からみると、レーニンの立場は「修正主義」の一種であろう。それどころかマルクス主義からはみだして、ブランキー主義、バブーフ主義、つまり日本でいえば徳川政権の転覆をくわだてた由比正雪、丸橋忠弥のたぐいとみえるかもしれない。

これと反対なのが、スターリンの見解である。レーニン主義はマルクスの教条を、そっくりそのまま、模範的に、帝国主義の時代へ適用したものである。ロシアだけに通用する理論ではなくて、全世界に通用すべき、ただひとつの正しい、帝国主義期のマルクス主義である。

Kによれば、レーニン主義が正統なマルクス主義であるか否かを、文献的に決定することは容易でない。レーニンの言動をマルクスの文章と照合しようとしても、あいにく、マルクスの理論には、多義的で不明確な部分が多くある。マルクスの理論は、さまざまに、時には正反対に「適用」できた。しかもそれぞれがマルクス主義に違反していなかった。

マルクスとレーニンとの連続、断絶の問題を考察するには、レーニンのマルクス思想への「忠誠」を検証するよりは、レーニン特有の傾向に目をむけるほうがよい、とKはいう。つまり、レーニンが、マルクスの遺産を「適用」、あるいは補完するための理論的作業において、いつでも出てくる共通の傾向である。

レーニンにとっては、あらゆる理論的問題が、革命のための道具という意識しかなかった。人間のあらゆること、すべての理念、社会の諸制度、諸価値、いづれも、その階級的機能で割りきられた。階級的な眺めかたを教えたのはマルクスである。だが、おなじマルクスは「私は人間である。人間のことならすべて私にとって関心がある」と書いた男でもある。革命にとって良いか悪いか、これがレーニンの関心の座標軸であったが、マルクスの関心の視界は、はるかに広がった。レーニンの考察においては、てっとりばやく革命に役だつように(しばしば過度の)単純化がなされたが、マルクスの考察は、たいてい、ずっと精密でこみいつている。

マルクス、エンゲルスの心の底には、人間の文化の連続性への信念があった。科学、芸術、道徳の諸原則、社会の諸制度の価値は、けっして、階級的利害に奉仕する道具としての価値だけではなかった。ところがレーニンにとっては、たとえば哲学の諸問題は、根本的には、なんら自立的な意義をもたなくて、けっきょく、政治闘争の道具であった。芸術、文学、法律、社会の諸制度、民主的諸価値、宗教の諸観念にかんしても同じ態度だった。これはマルクス主義からの逸脱ではなくて、史的唯物論の定式を、マルクス自身よりも徹底的に使いこなした、といえなくもない。しかし、たとえば、法律というものが、階級的抑圧のひとつの道具にすぎないなら、法律にもとづくブルジョア政府と、法律を無視する独裁政権とは、なんら違いはないことになる。あるいは政治的自由というものが、ブルジョアジーがその階級

的利害のために利用する、ひとつの道具にすぎないなら、ボルシェヴィーキとしては、権力を獲得した場合に、こういう自由を擁護してやる義務はないことになる。あるいは、科学、哲学、芸術における活動が、階級闘争の道具のひとつにしかすぎないとすると、論文や作品をつくる活動と鉄砲を打つこととは、なんら「質的な」違いはないことになる。状況において、どういう武器を使用するかという問題しか残らない。この考えはレーニンの初期らしい論文で述べられているが、ボルシェヴィーキの権力獲得後、文化政策の分野で、ひどい実害をあたえることになる。要するにマルクス主義とレーニン主義との関係は、レーニンによるマルクスの単純化、徹底化ということが出来る。例えばレーニンの「プロレタリア独裁」——「法律にもとづかず暴力にもとづく無制限の権力」^(註8)——はマルクスのそれに対して「忠実」でないというのは正しかろうが、結局マルクス自身の不斉合、不徹底をさらけ出すだけである。(大切なのは、どちらが現実に対して有効かである)。

とにかくレーニンは大物である。幾多の偶然の積みかさなりがあったにせよ、彼の思想と行動なしには10月革命は成功しなかったであろう。彼によって歴史の流れは大きく変えられた。ボルシェヴィーキは彼の作品であり、これが「現実の社会主義国家」の権力構造の原型、骨格となっている。ボルシェヴィーキとはどういうものであったか、これを検討することは、「現実の社会主義国家」を理解する手助けにもなるであろう。

レーニン主義の基本的な教条は1901年から1903年にかけて形成された。この時期に、ロシアにおける主要な反体制組織がつくられた。社会民主党内のボルシェヴィーキ派とメンシェヴィーキ派、社会革命党(エス・エル)、立憲民主党(カデット)である。これらが、革命までずっとたがいに闘いながら、反体制運動を指導した。(1870年生れのレーニンは、そのころ30代の前半である。年功序列がはばをきかず現代ならば、この年頃では零細な政治グループならば親分衆であろうが大きな政治組織では青二才あつかいであろう。なおメンシェヴィーキの指導者マルトフも、ほぼ同年輩である——以下、ボル、メンと略す)。

レーニンはボルの設計図を書き、それに従ってボルを組み立てた。『何をなすべきか』(1902)、『一步前進、二歩後退』(1904)等の著書、ならびにボルとメンとの分裂のいきさつを調査することによって、レーニンの考えた党の精神、姿を確認できる。

『何をなすべきか』は、いわゆる「経済主義」との対決である。「経済主義者」によれば、プロレタリアートは経済闘争に全力投球をすべきで、ツェール体制にたいする政治闘争は、当面、ブルジョアジーにまかせておけばよい。労働運動は労働者の運動であって、つぎつぎと自然発生的に起ってくる。経済闘争をつうじて、自動的に政治的意識も高まり広がってくる。『イスクラ』派の連中(プレハーノフ、レーニン、マルトフ等)は、理論とイデオロギーを重視しすぎるインテリの運動である。

これに対してレーニンは反論する。「革命理論なしには、いかなる革命運動も存在しえない」。この革命理論は、自然発生的な労働運動からは生れてこない。経済闘争は重要であるが、プロレタリアートの基本的な階級的利害は政治的革命によらねば達成できない。現存の社会体制とプロレタリアートとの根本的な対立の意識は、プロレタリアートの中へ、「外部から持ち込まれ」ねばならない。この「持ち込み」をレーニンはカウツキーから学んだ。カウツキーによれば、階級闘争と社会主義とは、並行的に発生したものであり、自発的な労働運動の中へ社会主義的意識を「持ち込む」ことこそ、社会民主主義の任務であった。レーニンは書く。「労働者は社会民主主義の意識を決して手に入れることはできなかった。この意識は、外部

からのみ、労働者にあたえられた。あらゆる国の歴史が証明するごとく、労働者階級は、じぶんの力だけでは、トレード・ユニオン主義的意識を産みだすことしかできなかった。トレード・ユニオンの意識とは、団結すること、企業家との闘争を実行すること、労働者にとって必要な法律を政府からもぎとること等、これらが何としても必要だという確信のことである。これに反して、社会主義の学説は、哲学的、歴史的、経済的理論の中から出現した。これは、所有者階級の教養ある代表者たるインテリによって作りだされたものである。^(註9)

党は、労働者の自発的な運動の支援者の組織に甘んじてはいけない。党は労働者の前衛、組織者、指導者、イデオログであらねばならない。こうでなくてはブルジョア社会の地帯をふみこえることはできない。「前衛」というコトバは『共産党宣言』でも使われており、プロレタリアの、もっとも意識的な部分のことである。なお、マルクスは党にかんして具体的な理論を残していない。ここまでのところではレーニンはマルクス、カウツキーの路線上にある。だがレーニンは一步ふみだす。「労働者大衆によってその運動の中から作りだされた、自立的なイデオロギーは、論ずるに価しないものであるから、問題は、つぎのようにのみ立てられうる——ブルジョアのイデオロギーか、それともプロレタリア的イデオロギーか。ここでは中間のものは存在しない（なぜなら、人類は）第3の《イデオロギーを創りだしたことはないから。そもそも階級対立によって引き裂かれている社会の中で、階級の外に、または階級を超えて立つようなイデオロギーは、けっして存在しえないのである》。(中略)しかし労働者運動の自発的な発展は、まさに、ブルジョア・イデオロギーへの従属へとみちびく。…トレード・ユニオン主義こそは、ブルジョアジーによる、労働者のイデオロギー的奴隷化を意味する。それゆえ、我々の課題、社会民主主義の課題は、自発性に対する闘争の中にある」。^(註10)自発性崇拜、これが「経済主義者」にたいするレーニンの攻撃の中心であった。労働力をよりよい条件で売るための闘争ならば、労働者だって心得ている。しかし社会民主主義の課題は、賃労働そのものの廃止である。

「経済主義者」にとっては、労働者の組織が革命のための組織になるはずであった。それは、できるだけ幅広く、できるだけ合法的であるべきであった。レーニンの党概念は、これの対極をなしている。「革命家の組織は、とりわけ、かつ主として、革命運動を職業とする人々を引きこまねばならない。労働者とインテリとのあらゆる差異は、このような組織のメンバーの一般的な特徴の背後へと、完全に後退してゆかねばならない」。^(註11)このような職業革命家の党は、労働者階級の信頼を得ねばならず、自発的な運動を指導せねばならぬことは、いうまでもないが、レーニンは、この党に対してスーパーマン的な能力、活動を要求する。それは社会的な不満から起る、あらゆる反抗の動きの中へ、介入し指導し、この反抗運動のエネルギーを、ツァーリズム打倒へと動員することである。(こういう困難なしごとをこなさねばならないから、腕のある職業革命家の組織が必要となる)。ただしレーニンの戦略、戦術にかんしてKが集めたデータは、後でまとめて眺めることとし、いまはレーニンの精神と姿だけを眺めることにしたい。

レーニンの前衛党の考え方は、反対者からエリート主義と批判されたが、前衛の概念はマルクスがすでに使っている。「外部からの持ちこみ論」も一見、奇妙ではあるが、ある意味では当然である。一般の工場労働者が『資本論』や『何をなすべきか』を書くわけにはゆかない。

レーニンの独特な見解は、自然発生的な労働運動はブルジョア意識をもたざるをえない、という点にある。こういう運動は真のプロレタリア（つまり社会主義）の意識を生産できない。

い、かつ、このふたつの意識（イデオロギー）以外に、ほかの意識はありえないからである。こういう推論は、マルクス主義の諸教条の中にも、カウツキーの中にも、けっして出てこない。（レーニンが受けとった限りでの）マルクス主義の政党の指導をうけなければ、その労働者運動は、ひとつのブルジョア運動でしかないことになる。労働者運動が、本物の労働者運動、つまり革命的運動であるのは、それが労働者たちの運動であるからではなくて、その運動が、正しい、すなわちマルクス主義的な、すなわちプロレタリア的なイデオロギーを所有しているからである。別の面からいえば、革命党のメンバーの中にプロレタリア出身が多かろうと少なかりょうと、その党がプロレタリアの党であることに変わりはない。労働者が大多数をしめる政党でもブルジョア政党ということになり、ちっぽけで、労働者階級とのつながりのない党でも、マルクス主義を信奉していれば、プロレタリアートの唯一の、真の代表と自任することができる。実際のところ、現実の労働者たちから、ほとんど支持されていないようなレーニン主義の政権党もこういう態度をとっている。

ただし、プロレタリア出身者のパーセンテージによって党のプロレタリア的性格は左右されないとはいえ、レーニンがプロレタリア出身者の比率をふやすことに無関心だったわけではない。かつレーニンはインテリを軽蔑していた。レーニンにとって「インテリ的」とは「動揺し、自信なく、個人主義がしみこんで、規律が守れず、むら気、雲の中をふわふわと」等と同じ意味であった。（インテリのはしくれを自任するものとしては、この断定は身にしてみるであろう）。レーニンは通常、労働者出身の党員を、より多く信頼し重用した。たとえばスターリン、あるいはマリノフスキー。後者はツェール政府の特高警察（オフラナ）の手先で、後年わかったことだが、ボルの活動は筒ぬけになっていた。^(註12)

レーニンによれば、マルクス主義によって基礎づけられた、プロレタリアートの歴史的使命を、党は知っている。社会の発展法則を知っている。党は本当のプロレタリア的イデオロギーをもっている。現実のプロレタリアートが、それを承認すると否とにかかわらず、かつ現実のプロレタリアートの意識がどうであろうと、そうなのである。党に指導されないかぎり、現実のプロレタリアの意識は未熟で、つまりブルジョア・イデオロギーしかもっていない。それゆえプロレタリアートは政治行動において、党によって「代行」されることができる、というよりむしろ「代行」されねばならぬことになる。プロレタリアートの利害と目標との決定は、プロレタリアートの参加なしに実行されることができる、というよりむしろ実行されねばならぬ。

しかもレーニンにとってデモクラシーは「手段」であった。合法的な組織においてはデモクラシーは自明であるが、レーニンの党は、中央集権的な、非合法的、陰謀団の組織であった。党内の民主主義は不可能であった。

プロレタリアートが権力を握った国、つまり、こういう党が指導し支配する「現実の社会主義国」において、「党の指導的役割」という神聖不可侵な原則は、こうして立てられた。「こうして『科学的社会主義』という概念は、『ユートピア』への、かつ労働者の自然発生的運動への対立概念として、労働者階級と社会全体とにたいする一党独裁のイデオロギー的基盤となった」。^(註13)要するに、社会のあらゆる問題にかんして、党は社会よりも賢い。社会は未成年者で党の指導、監督が必要なのである。党が、つまり国家権力が生活のあらゆる部門を監督する——これでは看板は美しくとも専制主義、全体主義である。

社会全体の中で党だけが「正しい」判断ができるように、党の中でもレーニンの派閥だけが、「科学的」判断ができるのである。

レーニンが党内に見解の対立が発生し、分派ができる可能性を、しかたがないことと認めていた。しかたがないが不健康なことと考えていた。なぜなら、ひとつの派閥だけが「正しい」はずだからである。『何をなすべきか』によると、「じっさいに科学を進展させた自信のある人びとならば、古い見解と並行して新しい見解をもつ自由を要求しないで、古いものを新しいものと取りかえることを要求するであろう」。(註14)「もてはやされる批判の自由とは、ある理論をほかの理論によって解消することではなく、閉鎖的な理論でも、考えぬかれた理論でも、あらゆる理論が自由に存在することを意味する。これは折衷主義と無原則を、意味する」。(註15)レーニンは、分派の形成、重要問題での意見の対立を、党の不健康の症状とみなしていたが、長いあいだ、この理由での除名処分等は実行しなかった。分派禁止が正式にとりいれられたのは革命後である(1枚岩の党)。革命前、レーニンは重大な問題では党の分裂にもしりごみしなかった。あらゆる見解の相違は、けっきょく、階級対立の「反映」である、とレーニンは信じていた。「党内の反対者は、彼の目には何時でも、さまざまなブルジョア的偏向の代弁者、または少くともプロレタリアートに対するブルジョアジーの圧力の代弁者であった。彼じしんがあらゆる問題において、現実的で明確なプロレタリアートの利害を体現していること、これをレーニンは決して疑ったことがなかった」。(註16)

『何をなすべきか』で骨組ができた党理論は、1903年夏のロシヤ社会民主党第2回大会で肉づけされる。この大会でメンとボルが分裂した。党員の資格にかんする党規約第1条が対立点となった。レーニンは「党機関のひとつへの個人的参加」を要求した。マルトフはもっとゆるい案をだした。つまり「党機関のひとつの監督と指導のもとでの活動」。二つの案は、一見、そう違いはなさそうであるが、実は根本的に対立していた。レーニンは、中央集権的で、1糸乱れぬ規律のとれた、戦闘能力の高い「職業革命家」の党を考えた。マルトフたちはドイツ社会民主党をモデルとしていた。つまり中央集権がゆるく、各支部も、かなり自由に自発的な活動ができる。「戦闘的」という点では弱くとも、大部分の党員はパート・タイム的に運動をやる。メンとの論争をふりかえりつつレーニンは書いた。「マルトフの基本的観念は——誰でも自分で党員だと宣言できる——まさに、あやまりの『デモクラチズム』、下から上への党建設という考えである。反対に私の考えは次の意味で『ビューロクラチック』である。つまり党は上から下へと建設される、党大会から個々の党組織へ」(註17) (『一步前進二歩後退』1904)。

ボルとメンとの対立は党組織論だけではなかった。たとえば、ボルは農民との同盟をねらい、メンはリベラルなブルジョアとの同盟へ傾いた。メンにとって労働条件の改善は、自立的な価値であったが、ボルにとっては「最終的決戦」のための準備という意味しかなかった。自由、デモクラシー等も、メンにとって自立的な価値であったが、ボルにとっては、それは革命のために、必要におうじて使用する道具(手段)でしかなかった。第2回大会におけるポサドフスキーの発言を、レーニンは全く賛成して書きのこしている。「ボクたちのこれからの政策をデモクラシーの原則に従属させ、この原則に絶対的価値をみとめることは必要なのか。それとも、あらゆるデモクラシーの原則はすべて、ボクたちの党の利益に従属させられるべきではないのか。ボクはダンコとして後者をえらぶ」。(註18) (このころ、短期間だけであるが、プレハーノフはボルの側に立っていた)。つぎに自由の問題。「自由のための闘争」という表現は、レーニンの演説やパンフレットに、いつでも使われているのであるが、けっきょく手段でしかない。「自由一般の問題に奉仕するばかりで、この自由をプロレタリア

的に利用する問題、つまり、社会主義をめざすプロレタリアの闘争のための、この自由の徹底的利用に奉仕しない者は、けっきょく、ブルジョアジーの利益のための闘士でしかない」(1905)^(註19)。

「徹底的利用」(ausnutzen, utilisieren)は、戦略、戦術のための基本的姿勢として早くからレーニンに意識されていた。自由もデモクラシーも革命のために、「徹底的に利用」すべき手段であった。

レーニンの視界には、究極目標たるプロレタリア革命が常に君臨しているが、当面の目標は、そのための手段としてのブルジョア民主主義革命、ツェール体制の打倒である。そのための一般的な戦略そして同盟勢力の問題が、『ロシア社会民主党の任務』(1898)の中でも論じられている。

社会民主党はツェール体制の弱体化に役立つことならば、あらゆる要求、反抗に介入し、支援すべきである。どの階級に向けられたものであれ、あらゆる抑圧のキャラクターを暴露すべきである。民族的、宗教的、身分的、その他のいかなる抑圧であろうと、それに対する抗議行動を支援すべきである。ただし、党は支援する抗議行動の直接の運動目的の代弁はやらない。しかも、支援し同盟する相手が、動揺しがちで中途半端なことも覚悟の上である。要するに支援とは「徹底的利用」のことである。(こういう戦術はレーニンの発明ではない。例えば伊達政宗は、敵対関係にある隣藩の百姓一揆を支援したらしいが、政宗が百姓一揆のファンであったわけではない。ドイツ帝国の軍上層部はレーニンを封印列車でロシアに送りこんだが、これもロシアを弱めるのが目的であった)。

「社会民主主義者はこの支持をあたえる。……共通の敵の没落をはやめるためである。ただしこの一時的な同盟者たちから何かをあてにするわけではない。そして彼らにいかなる譲歩もしない」(『ロシア社会民主党の任務』)^(註20) 「小ブルジョアの民主的要求を支持することは、けっして小ブルジョアを支持することを意味しない。反対に、ロシアに政治的自由をあたえるであろう発展こそ、特別な力でもって、小経営を資本による打撃によって亡びてゆかせるであろう」(『われわれ党の綱領草案』)(1899)^(註21) また、親密な同志あての手紙でレーニンは書いている。「例外なしに、あらゆる進歩的な諸潮流を、ナロードニキ・イデオロギー(「人民の友」派)や地主思想(Agrariertum)のボロ服から解放すること、こうして清潔にしておいてから、それらを利用すること。思うに、》利用する《というコトバは、支持とか同盟仲間というコトバよりも、ずっと正確で適切である。後のコトバはこの同盟の仲間の対等の権利を暗示している。あいにく、それら〔イデオロ的に清潔にされた進歩的諸潮流〕の連中は、例の時点で(この件で私は君と完全に了解している)後衛に組み入れねばならぬ、時には》歯がみしながら《。どうみても対等の権利には達していないし、連中の憶病、四分五裂等のために、いつまでたっても達しないだろう)。^(註22) 一見、シニカルにみえるかもしれないが、レーニンは本気でリアルに語っているのである。レーニンにとって政治的な同盟とは、ほかの社会的勢力を「革命」のために「徹底的に利用する」ことを意味した。

ツェール体制に反抗する勢力は、いづれも「徹底的利用」をされた。絶対君主制にたいして闘ったりベラルなブルジョアジー。信教の自由を求めた各宗派。大地主に反抗した農民。大ロシア帝国主義の抑圧に抵抗する周辺部の諸民族。いづれも例外ではなかった。(こういう反抗闘争にもぐりこんで、口も八丁、手も八丁の能力をふるって、リーダーシップをとったり参謀になったりした、ひとりひとりのボルは物凄い演技能力が必要であったであろう。プロレタリアートの利害、つまり党の利害を腹の中にしまっておいて、その闘争の直接の目標

をめざして、情熱的、献身的に行動せねばならないのである。たとえば、南部の回教系民族の反抗、独立運動に潜入したばあい、彼は独立運動のために命をかけて戦うであろう。しかも彼は知っている。党は「民族自決権」を無条件では支持せず、その民族を独立させるか、ロシア国内にとどめておくかは、プロレタリアート（つまり党）が権力を獲得したのち、党が決定すべき問題であることを）。

膨大な農民階級の不満、怒りを、革命の方向へ組織すること、ロシア内の被抑圧諸民族、のみならず全世界の植民地、半植民地の人びとの怒りのエネルギーを、革命へ、帝国主義の打倒へと、爆発させること。（後者は、その後のソ連の、新興国、半植民地国にたいする「外交政策」の基本となっている。ここにも「徹底的利用」の影が見えかくれしないであろうか）。この2つの巨大なエネルギー源の活用を考えだしたことは、レーニンの偉大さをしめす。だが農民も、けっきょく「徹底的利用」の対象となった。それはレーニンの死後、「農民たちよ、豊かになってくれ」という農業政策を主張したブハーリンの失脚とともに開始された。（ブハーリンも工業化に賛成であった。工業化のテンポ、それにともなう農民の負担が対立点であった）。革命が成功するまでは、革命が最高価値であったが、成功後はプロレタリアートの政権、つまりボル政権の維持、強化が最高目的となった。あてにしていた西欧先進国の革命は起らなかった。農民は巨大な、残存するブルジョア勢力であった。農村は資本主義的生産関係の温床であった。強制的な農業集団化が実行された。これは公的には農民の自発的な意志によるものとされたが、じっさいには警察的暴力の発動をふくめて、悲惨な情景が大量に展開されたであろうことは容易に想像できる。とにかく、こうして農民階級は政治的に無力化された。

さらによくみると、革命の、社会主義社会建設の、「徹底的利用」戦術の主体であるはずの労働者階級までが、「徹底的利用の」被害者で、政治的に無力な存在になってしまっていないのか。^(註23)

民主的諸制度も「徹底的利用」の対象外ではなかった。ボル系以外の新聞の発行は許されなかった（メンの新聞は1919年2月、禁止された）。^(註24)大学の自治は1921年、最終的に除去された。^(註25)ソヴィエト（レーテ、労・農・軍の代表の評議会）は1905年の革命において、自然発生的に作られ、1917年に復活し、大いに「利用」された——「すべての権力をソヴィエトへ」というレーニンのセリフ——が、實質的に空洞化させられ、ボルの一党独裁体制となった（1921年、クロンスタットの水兵が反乱を起したが、彼らはボルの一党独裁に反対し、本当のソヴィエト政権を要求した）。こういう「民主主義」の廃止の背景として、内戦、外国軍の侵入という「例外的非常事態」を考えねばならぬ。だが内戦が終り外国軍が撤退しても「非常事態」は続いた。（おそらくは、全世界がクレムリンの前にひざまづくまで、などとKは書いていないが）。「民主主義」を「ブルジョア民主主義」として廃止した根本原因は、けっきょく、レーニン主義である。つまり、労働者と農民の本当の利害は、ボル（その後のソ連共産党）が、労働者、農民よりも、より良く、「科学的に」理解しており、そのつどの労働者、農民の意向を確認しなくともよい、という信念である。

有名なレーニンの『遺書』は1922年の末から翌年の始めにかけて書きあげられたが、33年間、公表されなかった。それは病床からの叱責、警告である。トロツキーは自信が強すぎるとかブハーリンはマルクス主義者でないとか、その他党幹部への注意。少数民族を大事にせよ、とも。だが『遺書』の重点はスターリンをクビにせよという要求である。この粗野で残酷でむら気な男に権力が集中してしまった。新しい東洋的専制主義が出現する可能性が見えて

いた。レーニンは第2のスターリンの出現を予防すべく、中央委員の増員をも要求している。頼りない対策ではあるが、当時は、まだ若干の党内民主主義は残っていたから、多少のききめは期待できよう。しかし『遺書』は握りつぶされ、まもなくレーニンは死んだ。Kによれば、「この『遺書』は、現在よみ返してみると、絶望の叫びと聞こえる」。(註26) (Kが「現在」という時、これはハンガリー、チェコの悲劇までであって、いまの「現在」、つまりポーランドの動きはふくまれていない。労働者と農民の圧倒的多数が、労働者と農民のための1党独裁の党にたいして、異議を申し立てている喜劇的状況)。

革命のための手段としての党、レーニンの設計、施工は見事なものであった。中央集権、上位下達、一枚岩、戦闘的。能率の良さにかけては一級品であった。だが、この党が国家の統治権力となった時、全体主義的、専制的国家ができてしまった。レーニンの設計図には盲点があった。手段が目的を追いぬいた。「生産手段の私有」は廃止された。しかし社会主義の夢想はどこへ消えたのか。人間の幸福、人間の諸能力の多面的で自由な開花、自由で民主的な社会、そのための最低条件としての貧困と無知の追放。「自由の民とともに自由の国でくらす」という老ファウストの願いも、同じ夢である。レーニンも『国家と革命』(1917)において、奔放に「プロレタリア国家」の夢にふけた。この本はKによれば無政府主義の色彩が濃厚であるが、この夢も、ボル革命のその後の展開によって否定され、リアリストの「国家主席」たるレーニン自身によって、サンジカリズム的、無政府主義的陶醉として嘲笑された。

レーニンの設計図は、レーニンの善意ある意図に反して、「収容所群島」の設計図となった。

(以上の小論は「研究報告」というには、いささかおこがましく、「読書メモ」をレーニン全集からの孫引用で補強したものすぎない。なお、「カウツキーたち」とは「マルクス・レーニン主義」でないマルクス主義者、マルクス主義でない社会主義者を意味する)。

註)

1. Leszek Kolakowski; *Die Hauptströmungen des Marxismus. Band I* (1977), *Band II* (1978), *Band III* (1979), Piper Vlg. 3巻で合計1700頁の大著であり、Kはこれをかき上げるのに10年を費した。以下のKからの引用は第2巻の頁をしめす。レーニンからの引用は、孫引きであり、ドイツ民主共和国、中央委員会所属の「マルクス・レーニン主義研究所」が1961年から刊行しているレーニン全集の、巻と頁をしめす。
2. 『シュピーゲル』, 1980年9月8日号。
3. モゼレフスキ、クーロン著、塩川喜信訳、『反官僚革命』, 1973年、柘植書房。両氏ともに現在KORの活動家である。前者は初期から「連帯」の指導的立場にいる。
4. 381頁
5. 375頁
6. グラムシによると、歴史法則をニュートン物理学的な意味での「必然性」と考えるのは間違いである。プロレタリアートの勝利は「歴史法則」によって確実であり、歴史の歩みは「客観的に」プロレタリアートの味方である、こういう宗教じみた「慰め」は、プロレタリアートが弱者であった時期には、存在意義があったが、現在では有害である。(この項のみ第3巻, 255頁)。
7. 395頁
8. 555頁, レーニン全集第10巻211頁。注目すべきことだが、これはファシズムや軍部の独裁にもあてはまる。

マルクスの「プロレタリア独裁」はバリ・コミューンの経験をまとめたもので、圧倒的多数の人民大衆が政権を奪取した後、過渡期の処置として、もとの特権層、支配層にたいして政治活動の制限を実行することである。

9. 443頁, 第5巻385頁。
10. 433頁, 第5巻395頁。
11. 434頁, 同上468頁。
12. 437頁。『シュピーゲル』(1981年7月27日)のポーランド関係の記事にも、この件が登場している。
13. 438頁。
14. 439頁。第5巻, 364頁。
15. 439頁。同上, 379頁。
16. 439頁。
17. 441頁。第7巻, 410頁。
18. 442頁。同上222頁。
19. 442頁。第8巻, 503頁。
20. 421頁。第2巻, 336頁。
21. 421頁。第4巻, 237頁。
22. 421頁。第34巻, 13頁。
23. 422頁。
24. 543頁。
25. 同上。
26. 548頁。